

## 他文化圏との比較を介した日本近代文学及び映画における

### 死の表象の基礎研究

Basic research on images of death represented by modern Japanese literature and by Japanese films  
in comparison with the other cultures

城殿 智行

Tomoyuki Kidono

大妻女子大学短期大学部

Otsuma Women's University Junior College Division

キーワード：日本近代文学，映画，死生学

Key words : Modern Japanese literature, Japanese film, Thanatology

#### 1. 研究目的

加速化するグローバリゼーションは、いまや死生観の形成にまで、深く影響をおよぼしている。あらゆる媒体に膨大な死の表象が流通する近代において、人は単に臨床医学の限界で物理的に死ぬのではなく、むしろ死の表象を情報として散漫に消費することで、実際には己の死そのものからだけは目をそらして生き、やがては決して直視しえなかった己の死という個別性自体をも、統計学的な知見に基づく臨床医学に譲り渡して、死んでいく。

現在一般化しつつある、そのような生と死のあり方こそ、宗教の希釈された近代における、死の表象の生産と流通がもたらす避けがたい効果として、知的に分析されるべきではないか。1970年代以降に臨床の場で端緒についた死生学においても、いまだに表象分析の観点はおよそ不十分であるため、文学と映画を中心とした日本近代における死の表象のあり方とその歴史性を、他文化圏との比較によって明らかにし、現代においても社会の根幹を支えるべき死生観を再編する。

#### 2. 研究内容及び成果

①ハイデガー以後に死の表象不可能性を主題化した著作として最も重要なのは、J・デリダ『そのたびごとにただ一つ、世界の終焉』(Chaque fois unique, la fin du monde, 2003; 土田知則他訳, 岩波書店, 2006)である。たとえば、しばしば口にされる「かけがえのない存在の死によって、我々の世界に大きな「欠如」が生じたのだ」という世俗

的な弔辞は、一見痛切な情動の発露を装いながら、むしろ遺された生存者の観点ばかりを特権化する。それに対してデリダは、個別の認識者の死によって(彼・彼女が認識していた)世界それ自体がすべて消え失せたのだ、と現象学的一実存的に考え、またそうであるがゆえに、フーコーやドゥルーズ、レヴィナスらの追悼を、「喪」が本質的に不可能であると語ることから始めるが、そのようなデリダの思考は、死に臨む態度を、本応募課題と共有している。死にゆく人間の恐怖が、「自らの死後も持続する世界からの脱落」というイメージによって喚起される以上に、「世界という持続それ自体の消失」として、認識やイメージそのものが不可能になることによって強く喚起される臨床的な事実をふまれば、デリダの立論は、死生学的な観点から見ても、正当なものである。

また、P・アリエスは『死を前にした人間』(L'Homme devant la mort, 1977, 成瀬駒男訳, みすず書房, 1990)及びそれに付随する『死と歴史』、『図説 死の文化史』において、社会学的な観点から、複合的なイメージの変遷として死の歴史をとらえるべきだと主張し、死や虚無という超越的な審級が近代においてどのように表象されるのかを、映画においてこそ検証するべきである、と展望していた。もっとも彼自身は、バルイマンの『叫びとささやき』のような古典的映画へわずかに言及しただけで、映画分析はあくまでも可能性のみにとどまった。したがって、超越的な審級のイメージ形成を対象化するにあたっては、死のイメージを歴史的に論じたアリエスの大きな遺産を、あ

らためて正確に検証することで、20世紀以後の映画・映像をも語りうる理論へと鋳直さなければならぬ。アリエスの理論が惹起する主要な争点の一つは、宗教改革及び対抗宗教改革前後における「死の個別化」という主題であり、彼はその事例として、超越的な審級のイメージ化にまつわる大きな変質を、北方ルネサンスの画家たちに認めている。前述した通り、「固有の死」というイメージの形成とその希薄化は、近代社会一般における最大の関心事でもあり、アリエスによる仮説の理論的・歴史的な妥当性が検証されてしかるべきである。

以上のような、哲学的・社会学的観点の双方をふまえて、以下のようなスケジュールに則り、超越的な審級のイメージ形成を対象化する理論の整備を行った。6月－9月、「超越」をめぐる近代的思考の分析作業。10月－12月、近代的なイメージ形成をめぐる分析作業。1月－3月、経験論的な臨界の表象をめぐる分析作業。

②研究実施者は、経験的な表象の臨界をきざむ死や戦争などの出来事を描いた作品に、作家の意図や意志から逃れ去る意味作用を分析的に読みとろうと試みてきた（拙稿「大人の玩具—大岡昇平と「歴史記述」の頓挫」、『早稲田文学』2000・7他）。また科学研究費補助金挑戦的萌芽研究の成果として、明治中期から様々な異界や境界を描くことで、超越的な審級を言語的にイメージ化しようとして試みつづけた泉鏡花と、鏡花の文章こそが「最も映画的」と評して、鏡花原作の映画化を繰り返し試みた溝口健二の関係を主題に、言語と映像における、二重の意味で表象の不可能なものとは何かを論じた（同前「消された眉—泉鏡花と溝口健二の「映画的」文体」、『大妻国文』44, 2013・3）。同様の着想に基づき、日本近代文学における、超越的な審級の言語的なイメージ形成について、以下のようなスケジュールに則り、分析をすすめた。6月－9月、1930年代の文学における超越的な審級の分析作業。10月－12月、1940年代の文学における超越的な審級の分析作業。1月－3月、1950年代の文学における超越的な審級の分析作業。

③映像の分析をすべてラカン理論に回収する弊害はあるが、表象の不可能な超越的な審級の視覚的なイメージ形成について、いち早く論じたのは、S・ジジエック『斜めから見る—大衆文化を通してラカン理論へ』（*Looking Away: An introduction to*

*Jacques Lacan through popular culture*, 1991; 鈴木晶訳, 青土社, 1995) 他である。それに対して、研究実施者は以前から、精神分析とは異なる視点で、表象の不可能なものが視覚的な次元において生じさせる意味を主題として論じ（拙稿「蝶の採集」、『『明るい部屋』の秘密—ロラン・バルトと写真の彼方へ』青弓社, 2008）、また前述の挑戦的萌芽研究の成果として、世界的に定評のある溝口健二のディープ・フォーカスの意味を根本的に読みかえることで、溝口の「深い画面」に内包された表象の不可能性を明らかにした（同前「折鶴の行方—溝口健二と「深さ」の変容（二）」、『大妻女子大学紀要—文系』46, 2014・3, 同前「折鶴はなぜ落ちたのか?—溝口健二と「深さ」の変容

（一）」、『大妻女子大学紀要—文系』45, 2013・3）。同様の着想に基づき、日本映画における、超越的な審級の視覚的なイメージ形成について、以下のような計画に則って、分析をすすめた。6月－9月、1930年代の日本映画における超越的な審級の分析作業。10月－12月、1940年代の日本映画における超越的な審級の分析作業。1月－3月、1950年代の日本映画における超越的な審級の分析作業。

④研究実施者は前掲の溝口論においても、ウェルズ、ワイラー、ルノワールといったディープ・フォーカスで知られる欧米の映画作家と溝口の差異を、あくまでも視覚的な臨界におけるイメージ形成の問題としてあつかうことにより、映像様式史の規範と見なされるボードウェル (David Bordwell, “Mizoguchi and the Evolution of Film Language,” *Cinema and Language*, ed. Stephen Heath and Patricia Mellencamp, Frederick, MD: University Publication of America, 1983.) や、定評のあるキリハラハラの溝口論 (Donald Kirihara, *Patterns of time: Mizoguchi and the 1930s*, Madison: University of Wisconsin Press, 1992.) に異議をとねえ、映画という視覚的な表象の根本的な見直しをせまった。さらに現在推進中の科研費成果（同前「見えない傍観者—溝口健二と「あまりに人間的な」映画」、『大妻女子大学紀要—文系』47, 2015・3）では、日本の視覚文化の特質を欧米と対比させて論じたコーエン (Robert Cohen, “Mizoguchi and Modernism: Structure, Culture, Point of View,” *Sight and Sound* 47,2(Spring 1978).) やアンドリュース (James Dudley Andrew, Paul Andrew, *Kenji Mizoguchi, A Guide to References and Resources*,

Boston, Mass. : G.K.Hall, 1981.) , 特に文化本質主義的な傾向の強いデイヴィス (Darrell William Davis, *Picturing Japaneseess : Monumental Style, National Identity, Japanese Film*, New York : Columbia University Press, 1996.) に強く疑義を呈し, 異なる文化圏の映像を扱う際にふまえられるべき比較方法を提示した. 同様の着想に基づき, 欧米並びにアジア映画における, 超越的な審級の視覚的なイメージ形成について, 以下のような計画に則って, 分析をすすめた. 6月-9月, 1930年代の各国映画における超越的な審級の分析作業. 10月-12月, 1940年代の各国映画における超越的な審級の分析作業. 1月-3月, 1950年代の各国映画における超越的な審級の分析作業.

### 3. まとめと今後の課題

本研究の実施においては, 可能なかぎり広い視野に立ち, 言語および映像表象の分析に努めたつ

もりではあるが, 前年度に行った「欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の基礎研究」および科学研究費補助金による各種研究成果と照らし合わせると, 今後は死生学的な発想を歴史的・社会的にいつそう深く位置付け直すために, 各時代・各文化圏における超越的なものの表象様式そのものを概観する必要があるのではないかと感じた.

これまでの成果を活かしつつ, 研究内容をさらに転回させ, 社会的に寄与しうる研究の実践を心がけたい.

### 4. この助成による発表論文等

昨年度の研究成果「天覧と遙拝—「見えない傍観者」補注—」「人間生活文化研究」26, 2016, pp.107-110. に引きつづき, 順次, 研究内容の論文文化を予定する

(2016年3月31日現在)